# 『經傳釋詞札記』における古代漢語の日本語との対照研究の妥当性

# On the Contrastive Study of Classical Chinese and Japanese in *Jing-Zhuan-Shi-Ci-Zha-Ji*

西　山　　猛
Takeshi Nishiyama

**ABSTRACT**

*Jing-Zhuan-Shi-Ci* is a book of notes on such Chinese canonical texts as *The Analects of Confucius,* and was written in the Qing dynasty.

*Jing-Zhuan-Shi-Ci-Zha-Ji* are its reading notes which were written by Dr. Yu Min.

Dr. Yu Min studied the functional words of the Chinese canonical texts by applying the contrastive study of Classical Chinese and English, German, Russian, Sanskrit and Japanese.

In this paper the author especially criticizes Dr. Yu Min's contrastive study of Classical Chinese and Japanese.

## 1.

『經傳釋詞』（清嘉慶三年序、1798年）（以下『釋詞』と略す）は清代の経学者王引之（1766～1834）がその父王念孫（1744～1832）の支援のもとに著した中国古典文献学の著述の一つである。その内容は「經」（『易經』、『春秋』、『論語』、『孟子』等）、「傳」（『春秋左氏傳』、『公羊傳』等）及びその他周秦両漢の書籍に於ける「詞」（虚詞――機能語）を「釋」（解釈）したものであり，創見に富み，今日の斯学に寄与する所も大きい。

『經傳釋詞札記』（1987年）（以下『札記』と略す）は兪敏（1916～　　）氏(1)の上述書に対する「札記」（読書ノート）である。詳細は後述に譲るが，該書（『札記』）は特に所謂古代漢語と他の言語との対照・比較研究という面に於いて他の追随を許さぬ優れた注釈書である。対照、比較に引用された言語は英語、ドイツ語、ロシア語、サンスクリット語、日本語等の対照言語及びチベット語、漢語現代諸方言等の同族語である。

そのなかでも特にそのチベット語との比較研究は，兪（1949）、兪（1981）、兪（1984）等の著者兪氏の積年の漢藏語比較研究の集大成といった観が有り，該書全 106条中，チベット語に言及したものは38条にも及ぶ。

この比較研究に関して筆者（西山）は，嘗て西山（1989），p. 50 に於いても指摘したように，極めて慎重な論証を経た後でなければ，広範な承認は得難いと考える。またこういった研究で得られる結論についても，それは言語間の語族系統という大きな問題と関連づけて考えなければならないと考える。

筆者は該書に於ける古代漢語とチベット語との比較研究の妥当性について現在検討しているところであるが，その基礎としてまず該書全体を細かく読解する作業を行った。その間筆者が最も注目することとなったのは，古代漢語の日本語との対照研究であった。

筆者が日本語との対照研究に注目した理由は，とりもなおさず筆者が日本語を母語とするからに他ならないわけであるが，それにもまして筆者を注目させたわけは，該書で日本語と関連して取り上げられた計７条の中の６つの問題について，検討せざるを得ない箇所を多分に持っていると思われたからである。

そこで本稿ではこの６つの問題について細かく検討を加え，該書の日本語との比較研究について聊かの批評を試みてみたい。本稿は日本語で執筆したが，これは同じく日本語を母語とする日本人研究者の方々にまずその対照研究の妥当性を筆者とともに鑑みていただきたかったからに他ならない。また筆者には著者兪氏の母語である中国語に自ら翻訳する用意がある。

## ２．

該書には日本語と関連して【１】‘爲’と‘有’の問題、【２】‘其’の問題、【３】‘其’、‘夫’の問題、【４】‘儻（黨）’の問題、【５】‘若’の問題、【６】‘然’の問題、の６つの問題が論じられている。これらを順を追って検討してゆきたい。

### 【１】‘爲’と‘有’の問題――「存在」の表現をめぐって――

家大人曰：“‘爲’，猶‘有’也。”『孟子』滕文公篇曰：“夫滕，壤地褊小，將爲君子焉，將爲野人焉。”趙注曰：“‘爲’，‘有’也。雖小國，亦有君子，亦有野人也。”……（『釋詞』p. 47）

（訳）家大人（父念孫）は言う：“‘爲’は‘有（ある）’に意味が近い場合が有る。”『孟子』滕文公（上）に言う：“そもそも滕の国は，領土は狭くて小さいものの，政治を執る役人もいれば，農耕をする庶民もおります。”趙岐の注に言う：“‘爲’は‘有’である。小国ではあるが君子もいれば，野人もいるという意味である。”‥‥

案：‘有’跟‘是’是各種語言裏最麻煩的兩個動詞。有些語言表示存在用‘有’，比方日語説：“賛成する人がある”，‘ある’是‘有’。有些語言用‘是’。梵文説：“asti brahmaṇaḥ”（有個婆羅門），英語説：“There is a brahman”，俄語也説‘是’，不過他們覚着不太準，就説：“жил／был　брамин”（活過／是過一個婆羅門）。用‘有’給‘爲’作注釋，當然最近情理。‥‥（『札記』p.31）

（訳）　案：‘有(have)’と‘是(be)’は様々な言語の中で最も面倒な二つの動詞である。或る言語では存在を表すのに‘有’を用いる。例えば日本語では“賛成する人がある”と言うが，‘ある’は‘有’である。或る言語では‘是’を用いる。サンスクリット語では“asti brahmaṇaḥ”（バラモンがいる）と言い，英語では“There is a brahman”と言う。ロシア語でも‘是’と言うが，しかし（現在時制に於いて用いるのは――西山注）あまり自然に感じられないらしく，ただ“жил／был　брамин”（バラモンとして生きた／存在し

た）という時のみに用いる。‘有’を用いて‘爲’に注釈するのは最も情理に叶っていると言える。……

ここで『札記』は，古代漢語の「存在」の表現を日本語、サンスクリット語、英語、ロシア語と対照して論じている。

古代漢語では「存在」を表わす際、一般には‘有’を用いるが，‘爲’を用いる場合もある。その理由は，諸言語に於いて「存在」の表現には所謂「have 動詞」を用いる場合と「be 動詞」を用いる場合とがあり，よって古代漢語に於いて「have 動詞」である‘有’の代わりに別の言語では「存在」を表わす「be 動詞」‘爲’を用いることもありうるのだ，ということである。

この考え方の可否については暫く措くとして，ここで問題となってくるのは日本語に於いて「存在」の表現に用いる‘ある’は「have 動詞」なのか，という問題である。

「be 動詞」を用いる例として英語等を挙げるのに問題はないが，「have 動詞」を用いる例として日本語を挙げるのは些か問題がある。確かに漢字の‘有’に対して日本語は‘ある’と訓ずるが，古代漢語の或る一文字が持っている意味、性質と，日本語に於いてその文字に付された訓の持つ意味、性質は必ずしも一致するわけではない。例えば日本語に於いて‘ある’は“ここにリンゴがある”という形式で「存在」を表現できるが，“これはリンゴである”というように「判断」を表現することもできる。「存在」と「判断」を表現できるのはとりもなおさず「be 動詞」の特徴である。

「have 動詞」を用いて「存在」を表わす例にはたとえばフランス語等を挙げる方が適切であると筆者は考える。例えばフランス語では“Il y a des fleurs dans le jardin.”（庭の中に花があります。）というように「存在」を表現するのに一般には「所有」を表わす‘avoir’（ここでは三人称単数直説法現在‘a’）を用いる。フランス語には堪能である著者兪氏がなぜ日本語の方を例に挙げようと考えたのか理解に苦しむところである。

**【2】‘其’の問題 —— 日本語‘が’との比較 ——**

‘幾’，‘其’也。『易』小畜・上九曰：“月幾望。”集解引虞注曰：“‘幾’，‘其’也。”……（『釋詞』p.103）

（訳）‘幾’は‘其(それ)’という意味である。『周易』小畜・上九には“月は満月。”とあるが，『周易集解』に引く虞翻の注には“‘幾’は‘其(それ)’という意味である。”とある。

案：……古語‘主語’後頭往往加‘其’字，好象日語加‘が’。「大盂鼎」説：“雩我其遹省先王受民受疆土。”……（『札記』p.76）

（訳）案：……太古の言葉では‘主語’の後ろに‘其’字を加えることがよくある。日本語で‘が’を加えるのに似ている。「大盂鼎」に言う：“ここに私は先王の受けた人々と受けた領土を監察する。”……

ここで『札記』は，所謂太古漢語に於いて主語の後ろに‘其’を加える場合があるが，それは

日本語の‘が’と類似するということを述べている。

確かに主語に後置するという点だけに関して言えば‘其’は‘が’に類似するが，その一文中或は一節中に於ける機能を比較してみると，そこには語用上の差異が認められる。日本語の‘が’は一般にはその一文の主部が新しい情報であることを示すと言われている。例えば“これがリンゴです”という場合，その前提となっている談話は“リンゴとはいったいどんな果物なのだろう”ということであり，新しく示された情報は主部である‘これ’である。それに対して‘は’を用いて“これはリンゴです”という場合は，その前提の談話は“これはいったい何という果物なのだろう”ということであり，新しく示された情報は述部である‘リンゴ’に他ならない。

‘其’の用いられ方を原文所掲の「大盂鼎」を例に見てみると，その用法は寧ろ‘は’に類似することがわかる。「大盂鼎」では周康王がその臣下の盂に対して“夙夕紹我一人烝四方。”（如何なる時も私が天下を治める手助けをして欲しい）と述べた後に，所掲の“ここに私は先王の受けた人々と受けた領土を監察する。”の一文がくる。即ちここの文脈に於いて話題の中心となっているのは「我」なのであり，「我」は旧情報であって，述部である「遹省先王受民受疆土」が新しい情報であると言える。

だとすればここでは，日本語の助詞としては‘は’を挙げる方が‘其’の機能の説明にはより適切であったということができる。

或は兪氏には‘其’と‘が’との音韻対応がその念頭にあったのかも知れない。確かに‘其’の推定上古音価は*gjəg であり(2)，日本語の ga，朝鮮語の ga，チベット語の gyi 等にその対応が見出せるとも言える。しかしそういった推論は必ず言語系統への視野を伴わなければ恣意的なものに陥りやすい。よってもし音韻対応をその根拠と考えているのであるならば，それはあまりに慎重を欠くと言わざるを得ない。

## 【3】‘其’、‘夫’の問題――「指示詞」から「発語詞」への変換――

‘其’，指事之詞也。常語也。……
‘其’更端之詞也。……『書』無逸曰：“其在高宗，”、“其在祖甲，”　（『釋詞』 p.108）

（訳）‘其’は事物を指すことばである。常用語である。……
‘其’は話題を換えることばである。……『書經』無逸篇に言う：“さて高宗におかれましては，”、“さて祖甲におかれましては，”

案：至於「無逸」，上文是“周公曰：‘嗚呼，我聞曰：“昔在殷王中宗……”’。”明明是‘指事之詞’弱化成的。日語‘あの’本是指示代詞，後來變成‘發語詞’也就是‘更端’，重新換個話題。（『札記』 p.88）

（訳）案：「無逸」篇の方と言えば，上文には“周公は言った：‘ああ，私は聞いた：“昔殷王中宗におかれましては……”’。”とあるので，これは明らかに‘事物を指す言葉’が弱化して出来たものである。日本語の‘あの’はもともとは指示代詞であるが，のちに「発語の言葉」，即ち「更端（話題を換えることば）」に変わり，改めて話題を換える。

‘若夫’發語詞也。『大戴記』衞將軍文子篇：“文子曰：‘若夫知賢人莫不難。’”（『釋詞』p.153）

（訳）‘若夫’は言葉を始める時の言葉である。『大戴禮記』衞將軍文子篇に言う：“文子は言う：‘そもそも賢人を知ることはまことに難しい。’”

案：‘若夫’就是‘象那些’。‘夫’是遠指含地方義代詞。在別的語言裏，它一般不算虛詞。也有用它作發語詞的。日語的‘あの’就變成嘆詞（日文叫間投詞）了。北京口語的‘那麼’、‘這個’，有好些人説話的時候構思還没有成熟就慷慨地用，好象有些騎摩托的停車可不滅火兒一樣。（『札記』 p.121）

（訳）案：‘若夫’とは即ち‘あのように’という意味である。‘夫’は遠指で場所の意味を持つ代詞である。他の言語ではそのような語はふつう虛詞には含まれない。しかしそのような語を用いて言葉を始める時の言葉とする言語も有るのである。日本語の‘あの’は「嘆詞」（日本語では「間投詞」という）に変化している。北京口語の‘那麼’、‘這個’などは，多くの人が，話しをしていて考えがまだ熟していない時，感情が高まって用いる，それはちょうどバイク本体は停まっているのにエンジンは止っていないのと同じである。

ここでは‘其’、‘夫’といった代詞が間投詞へと変化し，発語の言葉に用いられることを述べている。そしてその現象を北京口語と比較したり，日本語と対照したりして論じている。

現代東アジア諸語では上引のように指示詞が間投詞に用いられることが多い。中国語や日本語以外に於いても，例えば朝鮮語で“その……”という時に，一般には指示詞として用いられる‘keu’を使うことなどがよく知られている。

ここで問題となってくるのは，古代漢語の‘其’、‘夫’といった代詞は発語の言葉に用いられるということは確かであるが，ではそれらは果して日本語等に見えるように間投詞として用いられるのか，ということである。

例えば前掲の『書經』無逸篇では“昔在殷王中宗，……。其在高宗，……。其在祖甲，……。”となっているが，ここに於ける‘其’は後に続く語句を強調する代詞であり，後続語句との結びつきが強く，決して“*其‥‥在高宗”（あの‥‥高宗におかれましては）のように間投詞として解釈することはできない。ここは「高宗におかれました時のことを申し上げれば」のように‘高宗’の時代であるということを強調しているのである。

また『大戴禮記』の方も衞將軍文子が子貢に「孔子の弟子のうちで誰が最も賢いか」と問うたところ「賢いということを知るのは難しいので答えられません」と言って即答を避けたのに対しての言明であり，「そういった賢人を知るなどということはもともと難しいことなのだ」というのがそのもともとの意味である。即ち‘若夫’の‘夫’は「そういった……」というように後続語句を強調する代詞であり，間投詞のように後に続く語句と切り離して解釈するということはできない。‘若夫’が現代漢語でしばしば「至於……」と訳されるのも(3)ここで述べた解釈の妥当性を示していると言うことができる。

## 【4】‘儻（黨）’の問題――「時間」から「偶然」へのプロセス――

‘儻’，或然之詞也。字或作‘黨’，……『莊子』繕性篇曰：“物之儻來寄也。”釋文：“儻，崔本作黨。”『荀子』天論篇曰：“夫日月之有蝕，風雨之不時，怪星之黨見。”黨見，或見也。……（『釋詞』p.133）

（訳）‘儻’は偶然を表わす言葉である．この字はまた‘黨’にも作る。……『莊子』繕性篇に言う：“物がたまたま来て寄るのである。”，その釋文に言う：“‘儻’は崔譔のテキストでは‘黨’に作る”。『荀子』天論篇に言う：“あの日や月に食が有ったり，時ならずして暴風雨が起こり，見知らぬ星がたまたま現れたりすると……”‘黨見’はたまたま現れるという意味である。

案：文十三年『公羊傳』説：“往黨，衞侯会公于沓。”何注説：“黨，所也。所猶‘時’，齊人語也。”懂点兒現代物理的人都懂得“時間”跟“空間”是分不開的，所以“所”可以當“時”講。日語“時間”説‘とき’，‘有時候’説‘ときに’。僖二十九年『左傳』説：“所不與舅氏同心者，有如白水。”就是“有不跟舅舅一條心的時候……。”從這裏引申成“假使”的意思。『莊子』的“儻來”就是“有時候來”，“碰巧了來”。“儻來之物”是“碰巧了來的東西”。『荀子』的“黨見”就是“有時候出現”。（『札記』p.107）

（訳）案：文公十三年『公羊傳』に言う：“往った時，衞侯（成公）は文公と沓で会合した。”その何休注に言う：“‘黨’は‘所’である。ここの‘所’は‘時(とき)’に意味が近い。齊人の言葉である。”現代物理がいくらか解る人であれば，「時間」と「空間」とははっきりと分けることができないということが解るであろう。よって‘所’は‘時’の意味に取ることができるのである。日本語では‘時間’のことを‘とき’と言い，‘有時候（ある場合には）’のことを‘ときに’と言う。僖公二十九年（二十四年の誤り —— 西山注）『左傳』に言う：“もし叔父上と心を同じくしないことが有れば，白水のように明白となれ。”これは即ち“叔父上と心を一つにしない場合が有れば……。”という意味である。このようなことから意味が派生して‘仮定’の意味になったのである。『莊子』の‘儻來’は‘ある場合には来る’，‘たまたま来る’という意味である。‘儻來之物’は‘たまたま来たもの’という意味である。『荀子』の‘儻見’は‘ある場合には現れる’という意味である。

ここではまず，本来場所を表わす‘黨’（儻）が時間をも表わすことになるということを指摘し，次にそれが仮定、或いは偶然を表わすことになるプロセスを指摘している。

本来場所を表わす‘黨’（儻）という言葉がどうして偶然を表わすようになるかという著者の説明は理に叶っており，そこに大過はないと言えよう。ただ現代漢語の‘有時候’が何故仮定、或いは偶然を表すようになったかと言えば，その意味が“……という時が有る”という原義から、仮定を意味する“……という場合が有れば”、或いは偶然を意味する“たまたま……という場合も起る”というように変化したに過ぎない。日本語の‘ときに’もその副詞句としての働きは，その成り立ちが名詞‘とき’に時間的、空間的な位置を表す格助詞‘に’が接続したということから考えても，現代漢語‘有時候’が仮定や偶然の意味を獲得していったプロセスとなんらその差異はないのである。

ここでは現代漢語の‘有時候’を説明するだけで充分だったのであり，日本語の‘ときに’を

挙げる意味はなかったと言えよう。日本語を挙げるということであれば，「場所」の意味を表わす‘ところ’を挙げる方が有効であったと考えられる。寧ろここで指摘しておくべきだったのは，‘林立’（林のように数多く並び立つ）に代表されるような，古代漢語に特有な名詞がそのまま状況語（副詞句）として機能する現象の方ではなかったろうか。「時間」を意味する名詞‘黨’（儻）が偶然を表す状況語に変化する過程は，古代漢語の品詞分類にも係わる重要な問題である。また“有所不與舅氏同心者”で示された時間節から仮定節への「引申」（意味の派生）は，英語の‘when’、‘if’をともに‘wenn’で表すドイツ語等を挙げれば理解に益したと思われる。

## 【5】‘若’の問題――「並列」の表現をめぐって――

‘若’猶‘及’也；‘與’也。『書』召誥曰：“旅王若公。”……

‘若’猶‘或’也。……『儀禮』士昏禮記曰：“若衣若笄。”襄十一年『左傳』曰：“若子若弟。”（『釋詞』 p.152）

（訳） ‘若’は‘及（および）’や‘與（と）’と意味が近い。『書經』召誥に言う：“王と周公に申し上げます。”……

‘若’は‘或（あるいは）’と意味が近い。『儀禮』士昏禮記に言う：“衣と笄とを……。”襄公十一年『左傳』に言う：“子と弟とを……。”

案：王氏的判断法在『士昏禮』、『左傳』表現得最突出：有兩個‘若’字的在這裏，有一個‘若’字的在上條。翻翻日語，有“父親も日曜日には子供と遊ぶ”用一個‘と’，也有“君とぼくと……”用兩個，講法全一樣。拉丁的‘aut’，‘或’，也有單用、雙用甚至三個一塊兒用的。王氏的形式主義也太強了。（『札記』 p.121）

（訳） 案：王引之氏の判断の方法は『士昏禮』、『左傳』に際立って現れている：‘若’の字が二つあるものはここにあり，‘若’が一つのものは前条にある。日本語の翻訳を見てみると，“父親も日曜日には子供と遊ぶ”と‘と’を一個用いているものも有れば，‘君と僕と……’と二つ用いているものも有るが，用法は全く同じである。ラテン語の‘aut’や‘或’は，一つ或いは二つ用いることも有れば，三つ同時に用いることすら有る。王氏は形式主義が強すぎるようである。

ここで著者は，王氏の判断法に対しての批判をおこなっている。王氏は‘A若B’と‘若A若B’を区別しているが，それは形式主義による弊害で，本来同じ用法であるという主旨である。

ラテン語‘aut’や漢語‘或’の用法を鑑みれば著者兪氏の批判は的を得ていると言ってよいであろう。ただ日本語の挙例には頗る問題がある。

‘君と僕と’に於ける‘と’は同類のものを並列する格助詞であり，ここの‘若A若B’に対応する日本語の適切な例と考えてよい。しかし“父親も日曜日には子供と遊ぶ”に於ける‘と’は同じ格助詞とはいえその用法は動作の相手、共同者を示すところにあり，上述の同類のものを並列するものとは明らかに異なる用法である。

ここは‘君と僕は’と‘君と僕とは’の二例を挙げれば充分だったのではあるまいか。挙例は

シンプルなものがよく，なおかつ複数例の場合はそれらの相違を際立たせるようになるべく語彙が類似するものの方が適切である。

**【6】‘然’の問題――「肯定」から「応答」への弱化――**

『廣雅』曰：“‘然’，‘膺’也。”‘膺’，通作‘應’。『禮記』檀弓曰：“有子曰：‘然。然則夫子有爲言之也。’”……此三‘然’字，但爲應詞而不訓爲‘是’。(『釋詞』 p.155)

(訳)　『廣雅』に言う：“‘然’は‘膺(応じる)’である。”‘膺’は‘應’に意味が通じる。『禮記』檀弓に言う：“有子は言う：‘そうか，それなら先生はそのように言ったのであろう。’”……ここの三つの‘然’の言葉は，応対の言葉以外の意味は無く，‘そうである’とは解釈できない。

案：日語‘はい’又是應詞，又表達肯定，正是既爲應詞又訓爲‘是’。不説應詞是從‘是’弱化成的就不够全面。(『札記』　p.123)

(訳)　案：日本語の‘はい’は応対の言葉である一方，肯定をも表す。この言葉はまさに応対の言葉でかつ‘そうである’と解釈される。応対の言葉というのは‘そうである’という言葉が弱化してできたということを説明しなければ，全面的な説明とは言えない。

ここでまず王氏は，‘然’には常用される「肯定」を表す用法の他に「応答」のみを示す用例があることを指摘しており，それに対して著者兪氏は「応対」、「肯定」双方を表す日本語の‘はい’を例に挙げ，最後に「応対」は「肯定」の弱化よりなったものであることを指摘している。

「応対」のみを表す‘然’が「肯定」の弱化よりなったものであるとする兪氏の指摘は正しい。ただその説明に日本語の‘はい’を例に挙げるのはいささか問題が有る。

‘然’は基本的には「肯定」を表す。王氏が「応答」のみを表す例に挙げた『禮記』檀弓や該書の挙例の際省略した他の『論語』、『孟子』の二例はそういう意味で特殊な例と考えてよい。またこの三例に於いても「肯定」の語気は充分認められ，日訳では“そうか！”と幾分の感嘆の語気を以て解釈すべきところである。

よって「応答」の‘然’は日本語の‘はい’とはかなりの隔たりが有る。日本語の‘はい’は「応答」のみを表す用法も一般的であり，日常用いられる“はい，お茶。”や“はい，違います。”に現れる‘はい，’の用法は英語の‘Yes,’や現代漢語の‘對，’に訳すことができない。またはその訳文は頗る不自然である。

日本人が英語を喋る時‘Yes,’を頻発して相手側に誤解を招くことがよくあるが，‘Yes,’の訳語を‘はい，’と考えずに‘そうです。’に置き換えて応対するとうまくいく時が有る。日本語の‘はい’はこのように古代漢語の‘然’に比して「肯定」の色彩がかなり弱い表現なのである。

## 3．

以上6つの問題について検討を加えてみた。

こうして見てゆくと著者兪氏の日本語に関する知識はやや「消化不良」の気味があると評さざるを得ない。【3】、【4】はひとまず措くにしても他の【1】、【2】、【5】、【6】に於いて筆者の指摘した問題点はひとえに兪氏の日本語に対する理解力不足からくるものであろう。

もちろん今回の日本語との対照研究の妥当性はあくまでも日本語に係わる部分だけに於ける問題であり，この結果がそのまま著者兪氏の積年の漢藏語比較研究にもあてはまるというような考えは筆者には全く無い。

ただ贅言を附せば，『札記』後記に述べられているようなチベット語との比較研究の可能性に関しては，もうすこし慎重な検証を経なければならないと筆者は考えている。

例えばその後記に挙げられている『詩經』とチベット語との比較の例，

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 『詩經』揚之水等： | 彼 | 其 | 之 | 子 |
| チベット語： | pha | gi | mi | 'di |
| (対応する漢字) | (彼 | 其 | 民 | 時) |

ここで '彼其' が 'phagi' に対応する点に関しては(4)ひとまず措くにしても，「修飾語＋被修飾語」の関係である '之子'（この・ひと）が「被修飾語＋修飾語」である 'mi 'di'（たみ・この）に対応することに関しては，その論の正しさを証明することはかなり難しいと筆者は考える。

というのは漢語に於いては甲骨、金文等の太古漢語から(5)現代に至るまで一貫して「指示詞＋被修飾語」の統語であるが，チベット語の方は所謂 Old Tibetan から(6)現在に至るまで「被修飾語＋指示詞」の統語であり，よってこの事実は上述の対応の正当性に対しての充分な反証となる。

ただこの漢藏語比較研究の妥当性に関しては始めに述べた如く，言語間の語族系統という広範な問題と係わってくるため，ここでは俄かに結論を出し難い。別稿にて詳細に検討したいと筆者は考えている。

（一九九三年九月）

＊チベット文字転写については Wylie（1959）に従った。

## 注　釈

(1) 兪敏氏は天津市の生まれ。1940年輔仁大学中文系卒業。1947年より燕京大学、北京大学を歴任，現在北京師範大学中文系教授である。詳細は「中國語言學家」編寫組（1984）pp.176-183　を参照。

(2) 推定音価については李（1980）の系統に従った。

(3) 例えば何樂士他（1985）p.470 を参照。

(4) 仮にこの二語が対応していると考えるにしても，この対応はあくまでも語彙レベルのものであって，どちらかが借用語である可能性も有り，言語系統の根拠としての資格を失うことになる。

(5) 高嶋（1991）を参照。

(6) 稲葉（1986）p.255、Hannah（1912）p. 95を参照。

## 参考文献

Hannah, H. B. 1912 *A Grammar of the Tibetan Language.* (Reprinted : Motilal Banarsidass Publishers PVT. LTD. 398pp. , Delhi, 1991)

何樂士他　1985　『古代漢語虚詞通釋』(北京出版社, 898pp., 北京。)

稲葉正就　1986　『チベット語古典文法學（改訂増補版)』(法蔵館, 504pp., 京都。)

李方桂　1980　『上古音研究』(表題作の他に「幾個上古聲母問題」、「中國上古音聲母問題」を所収)（商務印書館, 103pp., 北京。)

西山　猛　1989　「上古漢語における指示詞の認識構造」(『中国語学』236, pp. 42-52, 日本中国語学会, 東京。)

高嶋謙一　1991　「古代漢語太古編その５」(月刊『中国語』10月号, No. 381, pp. 45-48, 内山書店, 東京。)

Wylie T. 1959 A Standard System of Tibetan Transcription. (*Harvard Journal of Asiatic Studies,* 22, pp. 261-267, Massachusetts.)

兪敏　1949　「漢語的 '其' 跟藏語的 gyi」(『燕京學報』37, pp. 75-94, 北京。)

―　1981　「漢藏兩族人和話同源探索」(『北京師範大學學報』[社会科學版] 1, pp. 45-53, 北京。)

―　1984　「漢藏虚字比較研究」(『中国語文学論選』, pp. 320-357, 光生館, 東京。)

「中國語言學家」編寫組　1984　『中國現代語言學家（第三分册)』(河北人民出版社, 282pp., 石家莊。)

## テキスト

王引之　『經傳釋詞』(嶽麓書社, 長沙, 1984年本。)

兪敏　『經傳釋詞札記』(湖南教育出版社, 長沙, 1987年。)

（附記）該書を読むきっかけを与えてくださり，また古代漢語に関しての筆者の研究を機会有る毎に温かく励ましてくださっている文教大学の牛島徳次先生に此に感謝の意を申し述べます。